

タイ国での生活に関する一考察

下関市立小串小学校 教頭 北本 徹
(平成11年度派遣 タイ バンコク日本人学校)

1. はじめに

私がタイ国から帰国して21年という月日がすでに流れています。今現在のタイ国の様子は大きく様変わりしていることと思います。21年前の情報とはなりますが、当時のタイ社会、生活や文化等が何かしらの参考になればと思い、記憶の隅をたどりながら述べていきたいと思っています。

当時のタイ国の在留邦人は4万～5万人とも言われ、日本人にとってはとりわけ暮らしやすい国でした。気候はバンコクではまさに常夏で、正月あたりに3～4日肌寒く感じる以外は毎日が夏のような日々です。ただし、北部や東北部では11月～1月にかけて、気温はしばしば10度以下にまで下がる「冬」の季節となります。

タイの人たちは基本的に他人の生活への不干渉を暮らしのモットーとしていますので、日本から来た人たちは一様にのびのびした開放感を味わうようでした。ただ日本のようなもたれ合い社会ではなく、厳しい個人主義が時として顔を出すこともありました。

このようなタイという国で3年間生活させていただき、日本との文化の違い、いろんな意味での生活の違いを実感させられました。そこで、当時のタイの人々の生活や文化についてまとめてみました。

一口に生活、文化といっても枠のない幅広いものなので、自分なりに焦点を絞りまとめていこうと考えました。

まとめの流れは、以下の通りです。

2. タイの人々の生活について

(1) 人々と交通手段について(船、バス、BTS、タクシーなど)

(2) 買い物事情について(タラート)

3. タイの文化について

(1) タイの仏教について

(2) 食文化について

(3) タイダンスについて

4. おわりに

2. タイの人々の生活について

(1) 人々と交通手段について(船、バス、BTS、タクシーなど)

<船>

○ エクスプレス・ボート(ルーア・ドゥアン)

便利で簡単、安心して乗れるのがエクスプレス・ボートです。チャオプラヤー川(メナム川)を走るバスのようなものですが、渋滞もなく涼しく快適です。しかも、移動のついでに名所旧跡も見物でき一石二鳥なのです。お値段はというと、当時4バーツ(約12円)～8バーツ(約24円)が普



エクスプレス・ボート

通で、最高でも 25 バーツ (約 75 円) でした。

○ 渡し船 (ルーア・カーム・ファーク)

バンコクと対岸のトンブリー間を往復する渡し船。当時 1 バーツ (約 3 円) ~ 2 バーツ (約 6 円) を船着き場で支払ってから、乗船します。橋は架かっているのですが、歩いてわたるのは暑いので、渡し船を利用するそうです。



渡し船 (ルーア・カーム・ファーク)

<バス>

○ マイクロバス

このバスがタイの市内バスで一番高いバスです。小さいエアコンバスで、広告付きもあり、カラーは赤と銀の二色です。

このバスは 30 人の定員制で必ず座れてタクシー代わりにできてよい反面、通勤時は満員で乗れないことが多いそうです。

バス停で自分の乗るバスが来たら手を左斜め 45 度に傾けて (マイクロバスだけでなく他のバスやタクシーなどもそうする)、乗ったら料金箱にお金 (約 25 バーツ) を入れて左から出る切符を取り、降りる時は、ドア前のブザーを押すと付近のバス停に止まるようになっていました。

○ 赤バス

赤バスとは、エアコンなしのバスのことで、安くてタイ語を少し覚えれば簡単に乗れます。どこまで乗っても当時一人 3.5 バーツ (日本円で約 10 円)。1 つの駅はだいたい 1 キロ間隔です。エアコンはありませんが、走っているととっても気持ちがよかったです。でも、中はけっこう「ぼろぼろ」でした。

日本では、最後にお金を払いますが、赤バス (タイのバス) は、車掌さんが乗った人のところに来てお金を払うようになっています。日本のバスは、第 1 にきれいという感じがしますが、赤バスは中の様子に書いたように「ぼろぼろ」です。でも、見るとけっこう乗って、みたいな・・・と、思ったりもするバスでした。

○ 青バス

青バスとは、値段が当時一人 8 バーツ (日本円で約 24 円) のエアコンバスです。このバスは、名前の通り青色のバスです。バスに乗る時と降りる時・・・バスが来たらはやく乗らないと、バスはすぐに発車します。そして、席に座っていると車掌さんが来るので、切符が何枚いるかをいいます。(もちろん一人一枚)

降りる時は、ベルを鳴らします。ベル



バンコクならではの派手な青バス

は、赤色かオレンジ色なのでわかりやすいです。そして、バスが止まったら降りますが、この時にも早く降りないとすぐ発車してしまいます。

<BTS (スカイトレイン)>



渋滞の緩和に貢献？ BTS

1999年12月5日に開通した高架式の鉄道です。運営する会社（BANGKOK MASS TRANSIT SYSTEM）の頭文字を取って『BTS』と呼ばれます。通称はスカイトレイン。

陸上を移動する交通手段は、車やバイクなどしかなかったバンコクに登場した、道路の混雑に関係なく時間通りに素早く、また快適に移動できる画期的な乗り物です。

ドイツのシーメンス社がシステムを請け負い、スマートな車両はポルシェのデザインといわれています。料金は距離制となっており、当時10～40パーツ（約30円～120円）とバスに比べると少し高めでした。子ども料金はなく、数人で移動することを考えれば、タクシーよりも安くて楽な乗り物であるといえます。

ドイツのシーメンス社がシステムを請け負い、スマートな車両はポル

<タクシー>

○ タクシー・メーター

料金メーターを使っているタクシーを『タクシー・メーター』と呼んでいます。メーター付きのタクシーなんて当然のことだろうと思うかもしれませんが、バンコクでは1992年から走り始めたとても歴史の浅い乗り物なのです。それ以前は、交渉で料金が決められていたため、外国人には利用しにくいものでした。

現在では、メーターのおかげで気軽に利用でき、なおかつエアコンもついているので快適な交通手段となっています。燃料は、日本のタクシーと違いガソリンで走ります。特に当時は、中古のカローラが主流となっていました。

交渉制のタクシーもまだまだ走ってはいましたが、めっきり数は少なくなってきました。

○ トゥクトゥク（料金交渉タクシー）

「タイにあって日本にはない」といわれて、すぐに思いつくのがトゥクトゥクです。3輪の体にど派手なカラーリング、不思議な乗り物ですね。もうもうと排煙を吹き出し、甲高い音をばらまきながら通りを突っ走るその姿は、運河ボートと同じくバンコクの顔となっていました。名前の由来はそ



トゥクトゥク

の『トゥクトゥク』という

軽快な排気音からといわれています。定員は3人ですが、運転手が了承すれば何人乗っても構わないのがタイならではの。子どもが7～8人重なり合って乗っていることもよくありました。

(2) 買い物事情について (タラート)

○ 室内タラート

タイの原宿と呼ばれる「サイアム」という所にある室内タラートによく行って来ました。日本の商品も沢山売っています。タイでもサンリオの商品が沢山売っているお店もありました。安い物は当時88バーツから高い物は110バーツ（日本円だと264円～330円）で日本のキャラクターのメモが買えました。日本と変わらない流行の服や靴がいたるところで売っています。ブレスレット（アクセサリー）やヘアピンもけっこうかわいい物が売っています。なんとなく見ていると、日本のひらがなの書いてあるTシャツを発見しました。タイでは日本のものがはやっているからだと思います。

「きにいました」と日本語で書いてある看板を発見しました。やはり日本語があふれていました。タイをあんまり感じさせないですね。

○ チャトチャク・ウークエンド・マーケット

これぞバンコク最大のタラートなのです。毎週土曜日・日曜日の朝9時～夜遅くまでやっています。なんでもござれのマーケット。衣類・台所用品を始め、工芸品・陶器・書物・ペット・植木など、とにかくありとあらゆる物がびっくりするほどの値段で売っています。



Tシャツは1枚当時35バーツ（約105円）

1つの町と言っていいほどとにかく広い大市場です。

露店や行商人の数も入れると、店の数は1万以上あるといわれていました。「周辺の露店もいれたら一体いくつになるだろう」というのが率直な感想です。

買い物客は毎週20万人以上。内部は迷路のようになり組んでいます。

中心にある時計台を中心にしてみて回ると、目印となってよかったです。エアコンがなくて暑いので、扇子を持っていくと多少は暑さしのぎができました。

お店の人と、タイ語を学び会話をしてみると結構安く売ってくれました。

3. タイの文化について

(1) タイの仏教について

○ 概要・歴史

タイには28,000寺院あり、僧は29万人いるそうです。人口の約90%以上が仏教徒です。王室も仏教に対しては、特別な保護をしています。

スコタイ時代に仏教が積極的に取り入れられました。南方上座仏教は、歴代の王によって秩序維持の手段として、また、中央集権国家を築いていく手段として民衆へ広げていきました。一方、民は、素朴な心で、仏教への帰依の姿勢の中に精神の安定を求めました。

○ タンブン（積徳）

タイの朝の町の風景にもなっている僧への食事の供養もタンブンであり、お寺へのお布施、生き物を解き放つ行為もタンブンとされています。仏教では一般に、富裕な者、社会的地位の高い者は「徳が多く」、不幸で運の悪い者、貧しい者は「徳が少ない」とされています。輪廻の現象世界ではこうした貧富の差や地位や能力の差、運、不運の差ができるのは、個人が過去世及び現世において集積した徳の量であるとされています。善行貯金のようなもので、これが人の運命や宿命を作り、さまざまな人間の条件を決定していくという考え方です。日常生活の行為として人を助ける行為や助け合う感覚、共存する感覚仏教のタンブンの精神を通して培われています。



バンコク最大の見所

ワットプラケオ

（2）食文化について

「タイの家には台所がない」といわれます。でも、ない家があるのは本当ですが、台所設備がないというのは嘘の話です。台所があっても、あまり使用しないというのが真実です。

タイでは、どこの町にも食べ物を調理しながら売っているおかずの屋台や、簡単なテーブルで食事のできる屋台がたくさんあります。昼休みともなるとオフィス街の屋台はほとんど満席になるのが現状です。

その屋台では、麺類などはかなり薄味になっています。ちなみにバーミーナム（日本でいうラーメンは一杯当時 20 バーツ）です。薄味になっている理由は、個人の好みが尊重されていて、客はテーブルの上に何種類も用意されている調味料を使用して、自分の好みの味に仕上げて食べます。箸とレンゲが用意されているので、日本人には親しみやすいです。調味料の中には、砂糖もあって面食らうこともありますが、麺類のスープにトウガラシと砂糖をそれぞれスプーン一杯ずつ入れてみると、不思議とこくのよう



屋台の様子

なものが生まれ意外においしいのです。

ご飯ものは、スプーンとフォークを使って食べます。これは東南アジアの都会では一般的なスタイルで、ここバンコクでも例外ではないようです。右手にスプーン、左手にフォークを持ち、フォークで押さえたり集めたりしてスプーンですくって食べます。

注意したいのは、どんな場合でも皿やどんぶりは持ち上げません。スープをどんぶりから直接すすったりするようなことはマナー違反のようです。

(3) タイダンスについて

○ タイ舞踏とは

タイ舞踏はタイ語でラム・タイといいます。ラム・ダーブ（剣の舞）、ラム・パット（扇の舞）、ラム・ロン（戦いの舞）や民謡で踊るラム・ウォン（輪踊り）などさまざまな種類があります。

北タイでは舞踏のことをフォーンともいい、フォーン・レップ（爪の舞）、フォーン・ティエン（ロウソクの舞）などが有名です。タイ舞踏は地方によっても表現方法や衣装、音楽にも違いが見られます。北タイの踊りは優美で動作がゆったりしており、袖の長い衣装が多いのに対して、南部ではテンポが速く表情のメリハリもはっきりして肩のたあでやかな衣装で舞います。

タイでは伝統的に良家の子女は欠かせないたしなみとして、踊りを習います。タイの女性の指は見事に反り返りますが、これは親や祖父母が1歳の頃からトレーニングをさ



キムの演奏風景

せるからだそうです。幼稚園から舞踏を覚え、小・中学校の体育のカリキュラムにもタイ舞踏が入っています。教師は、舞踏学校で再トレーニングを受け、生徒に教えます。男子も剣の舞などを習い、タイ人ならほとんどほとんど誰でも美しく舞うことができます。あでやかな身のこなしは、訓練の賜なのですね。

タイダンスには欠かすことのできない、弦楽器「キム」。2本のマイティーキムというもので弦をはじき演奏する。とても優雅な音を醸し出す楽器で、タイダンスを華やかにする楽器です。

4. おわりに

ある日、私は3年間バンコクに住んでいながら、あまりにもタイのことやタイ社会のことを知らない自分に愕然としました。私はタイのことを理解しようという気持ちになるのが少し遅かったようです。しかし、奥行きのあるタイ社会のことは好きで興味はもっていました。

3年目にはよくカメラやビデオを持ち歩き、タイ人の日常生活を自分の目で見て歩きました。バンコクのヤワラート（中国人街）を歩いてみると、このバンコクの街の歴史の深さを感じました。しかし、タイという国はまだ200年と少しの歴史しかない国です。バンコクの街も1960年位には2百万人ぐらいしかいなかったようです。それから40年たった

今、人口は3～4倍増えています。つまり、バンコクという都市は急速に発展した新興都市なのです。

その新興都市の抱える問題はたくさんあると思います。それらを解決するために今、政府も少しずつ手を打っている状況ではないでしょうか。実際、道路は立体交差になったり、主要幹線道路のつながりは非常によくなったりしつつありました。今後のバンコクやタイの姿を見たいものです。ただ、タイという国のずっとあった良さというのはどんなことがあってもなくなってほしくない強く願います。

この度は、乗物から食文化、ダンスまで、日本の文化と比較しながらまとめてみました。それぞれにおいてタイ人の気質に合ったもの、タイの地形にあったもの、また、歴史的背景をもって発展したものが生活と密接に関わりながら存在していることを実感しました。

タイ人ならではのものに触れ、タイ人たちとともに生活し、タイの「よさ」や素晴らしさを実感した3年間であったように思います。また、外国の文化に触れることを通して、日本の「よさ」というものも再認識できたようにも思います。

この宝の経験を思い出しながら、これからの教員生活に生かしていけるよう努力していきたいと思っています。

最後に、このような経験談を執筆する場をいただいた皆様に、感謝を申し上げます。

